

旅の空、時々 地の芋

－ シリア編 －

東京農業大学大学院国際農業開発学専攻 モハンマド シエカリ
(翻訳；東京農業大学 夏秋 啓子)



図1) シリアの国土。日本に来ていつも聞かれるのは、シリアはどこにあるのか？という質問だった。シリアは地中海に面し、イラクの西に位置している。

・豊かな文化の国シリア

私はシリアからの留学生。日本の文部科学省の奨学金により日本に来日して2年半になろうとしている。現在は、妻と2人の子供とともに東京に住み、ジャガイモのウイルス病について研究に励んでいる。

シリアってどこにあるのですか？これは、私が日本に来て、よく聞かれる質問だ。シリアは、アジアの南西、そして、地中海の西の端に位置している(図1)。北はトルコ、東はイラク、南はヨルダン、そして西はレバノンと国境を接している。シリアの国民はそのほとんどがイスラム教のアラビア人だが、クルド人、アルメニア人、チェルケス人、トルクメン人などもおり、また、キリスト教徒な

ど他の宗教を信じる人々も住んでいる。

すでに紀元前2世紀にはシリアは大帝国となっていたが、帝国内のさまざまな人々、また、戦う敵国の人々などとの関わりが、シリアの文化をより豊かにし、文明を発達させてきた。紀元前2400年ごろの帝国の中心にあった古代都市エブラ(Ebla)はシリアの北部にあり、その発掘作業は1970年代から続いている。そこから出土した銘板は、シリアが洗練された文化を持ち、また、メソポタミアやエジプトまでもを結ぶような広い商業ネットワークによる強力な集合体を持つ帝国だったことを示している。

エブラの言語はセム族系言語の中でもっとも古いものであると考えられており、エブラ遺跡の銘板に見られる膨大な碑文は、メソポタミア文化やエジプト文化にも匹敵する進んだ文化がすでにシリアにあったことをうかがわせる。大帝国の王宮には、エブラの真の宝とも言うべき皇帝の文書館があり、そこには、1万7千点にもなるという粘土製の銘板が納められていたのである。

現在シリアの首都であるダマスカスは、世界で最も古くから人々が暮らしてきた都市であるといわれている。エブラの粘土板にもすでにその名前が記されており、紀元前の3世紀にわたって大きな経済的影響力を持っていたことが知られる。また、ダマスカスの北



図2) 現在に残るアレppoの城砦の正面。観光地としても有名である。

350キロメートルのところにあるアレppoは、シリア第二の都市であり、これもまた、人類最古の都市の一つである。聖書に出てくるアブラハムは、アブラハムの時代よりも前に建てられ、そして今なおアレppoに残っている城砦(図2)の上で天幕を張ったと伝えられている。彼はそこで、彼の灰色の牝牛から乳を搾ったので、そのことにより、アレppoはHelab Al-Shahbaと呼ばれるようになった。これはシャハバという名の乳を搾ったという意味である。このように、日本の皆さんがシリアのどこを訪ねたとしても、このようにたくさんの歴史的な都市の存在が、人類の歴史について語りかけるに違いない。

・シリアの農業とジャガイモ

シリアの国土面積は約18万平方キロメートルで、21%が耕地、20%が非耕地、そして、45%が草地や牧草地であり、森林は3%程度に過ぎない。人口は約1,900万人であるが、その約半数は農村に住んでいる。農家の耕地面積は、およそ41%の農家が2~20ヘクタール、27%の農家が0.5~2ヘクタールとなっている。

シリアには四季があり、平均気温が22度

の春(3月中旬から6月中旬)と秋(9月中旬から12月中旬)、平均気温が32度にまでなる夏(6月中旬から9月中旬)、そして、平均気温が10度まで下がる冬(12月中旬から3月中旬)に分かれている。農業地帯は、年間降雨量が350ミリを越える地域から、200ミリ以下の地域まで5ゾーンに分けられるが、小麦、大麦、ワタ、ジャガイモ、サトウダイコン、スイカ、トマト、レンズ豆、キュウリ、ヒヨコ豆、ソラマメ、タバコ、エンドウ豆、レタス、キャベツなどが育てられている。

その中で、バタタと呼ばれるジャガイモ、そしてバタタフルワ(甘いイモの意)と呼ばれるサツマイモが、シリアの主要なイモ類である。しかし、サツマイモの生産は地中海沿岸部に限られており、焼いて食用にしたり、菓子やピクルスにしたりして利用されている程度である。一方ジャガイモは、シリアの人々にもっとも親しまれ、家庭でも良く食べられているイモといえる。

しかし、シリアにおけるジャガイモ生産の歴史は古くない。アラブ社会においてジャガイモは外国の食べ物であり、Kalkas firenji(外国人の植物の意)と呼ばれてきた。1844年に栽培されていたという記録はあるものの、大規模な生産は近年になってのことである。1920年代には、ダマスカス周辺の高原に住む農民たちが、エジプトやレバノンからの種イモを用いてジャガイモ栽培を始めていたが、それが次第にシリアの他の地方にも広まっていったのである。

ジャガイモ栽培は、春期(2月から3月に種イモを植えて、6月に収穫、栽培面積11,877ha、収穫量は23.814t/ha)、秋期(8月

植え、12月からの収穫、12,188ha、15.454t/ha)、夏期(4月植え、8月収穫、724ha、21.273t/ha)の3期があり、合計約24,789haで栽培されている(図3)。ただし、夏期栽培はダマスカスとホムスという地域に限られたものになっている。

シリアにおける1年間のジャガイモ総収穫量は50万トンであり、春期には58%、秋期には39%、そして夏期にはその3%が収穫されている。2003年現在では、シリアの北部にある、アレッポ州、イドリブ州、そしてハマ州の3州において、シリアのジャガイモの72%が生産されている。

シリアでは、ジャガイモは伝統的に副食として使う野菜として扱われ市場や八百屋へ行けば、一年中入手することができる(図4)。国民一人当たりの消費量は23.4キログラムで、ゆでたり、揚げたり、他の野菜や肉と一緒に料理して食べる。わが家でも、ジャガイモは副菜としてしばしば食卓に上る(図5)。

・ウイルス無病種イモの生産

さて、私の勤務先であるシリアの農業・農業改革省に属する種苗増殖共通組織(The General Organization for Seed Multiplication; GOSM)は、1975年に創設された。1976年にGOSMはエリートクラス(Eクラス)と呼ばれる優秀な種イモのヨーロッパからの輸入を開始し750トンを入力したが、その量は、1992年には8,000トンにまで増加した。その後、2003年には6,000トンに、2004年と2005年にはそれぞれ5,000トンに減少している。GOSMが種イモを輸入するヨーロッパの国々は、オランダ、イギリス、アイルランド、そしてフランスである(片山、2005b)。

Draga, Marfona, Agria, Burren, Diament, Lestiaといったたくさんのジャガイモの品種が輸入され、GOSMと契約した農家がこれを栽培して収穫したイモは、Aクラスの種イモとなる。GOSMは土壌伝染性の病害を避けるために、Eクラスの種イモは小麦、ワタ、インゲンマメ、サトウダイコンといった作物を取り入れた5年周期の輪作圃場で栽培している。こうして作られたAクラスの種イモは、同年の秋期あるいは翌年の春期に一般の農民たちによって使われる。場合によっては、この第2世代からとったイモが、さらに種イモとして利用される。

しかし、種イモの輸入は同時に、様々な病気の侵入の機会となっており、ウイルスについても、複数のウイルスや系統が発生している。そこで、輸入種イモの量を減らすことも

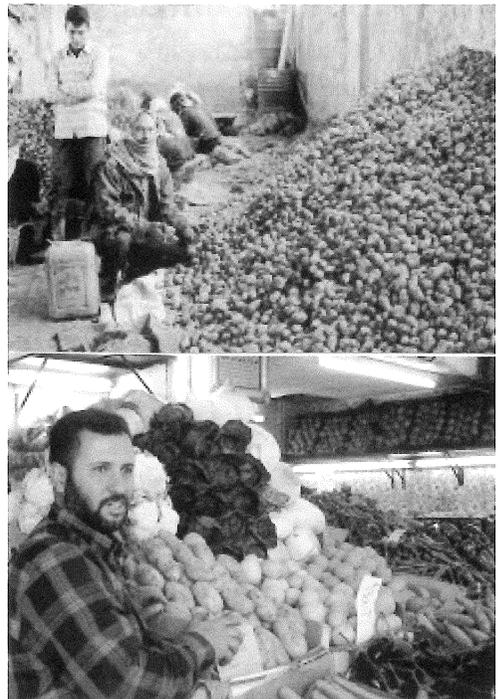


図3) 収穫を喜ぶジャガイモ農家。

図4) ジャガイモや野菜を売る店(片山 克己氏撮影)。

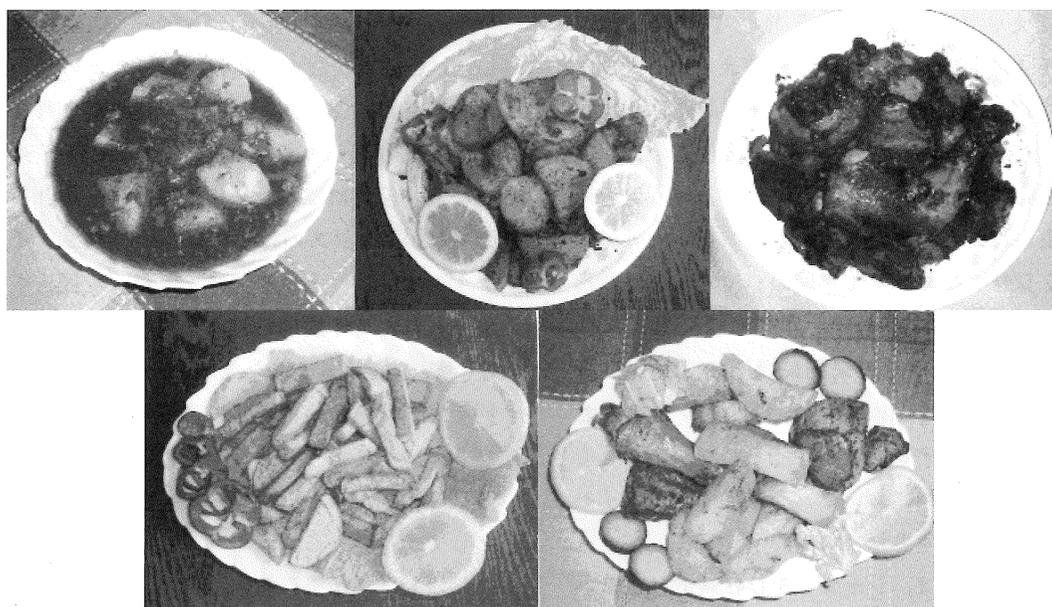


図5) ジャガイモを使ったシリアの様々な家庭料理。左上より右下へ。①ジャガイモと羊肉のトマトソース煮、②ニンニクなどのスパイスとともに蒸した揚げジャガイモ、③トマト、ジャガイモ、鶏肉のオープン焼き、④フライドポテト、⑤鶏肉とジャガイモのローストレモン添え

目的の一つとして、GOSMは1990年から種イモ生産の国家プロジェクトを担うことになった。日本のJICA（国際協力機構）からも機材や技術の供給を受けた。特に、長期あるいは短期の専門家が日本から派遣されて、種イモ生産を開始した。また、多くのシリア人技術者が研修を受けることになった。何人かは来日の機会を得て、試験場や種苗管理センターなどで研修を受け原原種の増殖体系などを学んだ。

このプロジェクトにおいては、種イモ生産は茎からの培養苗を使った健全苗生産から始まる。試験管内で得られた苗は、アブラムシの侵入を防止した温室に移植され、ミニチューバーが作られる。このミニチューバーは引き続き温室で生育して、そこから得られた種イモは、スーパーエリート（SEクラス）と称される（図6）。このプロジェクトによっ

て、シリアでも種イモの生産と供給が徐々にできるようになってきた。

・ホスピタリティな農村の人びと

さて、最後に、シリアの農家の様子を紹介することにしよう。通常、農民たちは家族とともに自分の圃場のそばに建てた家に住み、鶏を飼って卵を得たり、羊、ヤギ、牛などを飼って搾乳してミルクを飲む。また、ミルクからは自家製のチーズやヨーグルトも作っている。農地は毎年、3～4分割し、順に小麦、ジャガイモ、ワタなどを栽培している。自家用のトマト、ナス、パセリといったものを周年作る区画もある。ジャガイモ農家は、春と秋に同じ圃場を使ってジャガイモを作るが、秋期のほうが水や肥料を多く必要とすると言う。これは、春期に水や肥料をたくさん消費するためらしい。

もし皆さんがシリアの農家を訪ねれば、彼らが豊かであってもそうで無くてもきっと温かく歓迎されるにちがいない。シリアの農民は一般にとっても友好的で、特に外国人となればぜひわが家に招待したいと考える。もし皆さんが彼らの家に招待されれば、最初にはチャイと呼ばれる紅茶か、苦いコーヒーが歓迎の印として出される。そして、まったく知らない旅人に対してであっても、朝食であれ、夕食であれ、食事を出すのが普通だ。食事時には、ヨーグルト、子羊の肉、パンといったものと一緒にジャガイモも供される。実際には、農産物の収穫量がどの程度になるか、あるいは、収穫物の価格がいくらになるかの保証がないため、多くの農民の経済状態は不安定である。同じ農民が、今年は豊かだったの

に、翌年は貧乏になってしまうこともよく起きる。しかし、豊かな年になってお金があれば、農民たちも車を買ったり、土地を広げたり、息子の結婚費用にしたり、あるいは、メッカへ巡礼に行く費用として貯金したりするのである。

私の勤務するGOSMでは、健全な種イモ生産を重要視している。中でも、ジャガイモのウイルスは、ジャガイモ生産を減少させ、ジャガイモ農家の収入をも減少させる大きな障害要因である。そこで私は、このような農家を助けることができるよう、ジャガイモのウイルスの勉強をする決心をして来日した。ジャガイモのウイルスによる被害をできるだけ小さくし、農民たちが豊かになれるよう、貢献したいと考えている。

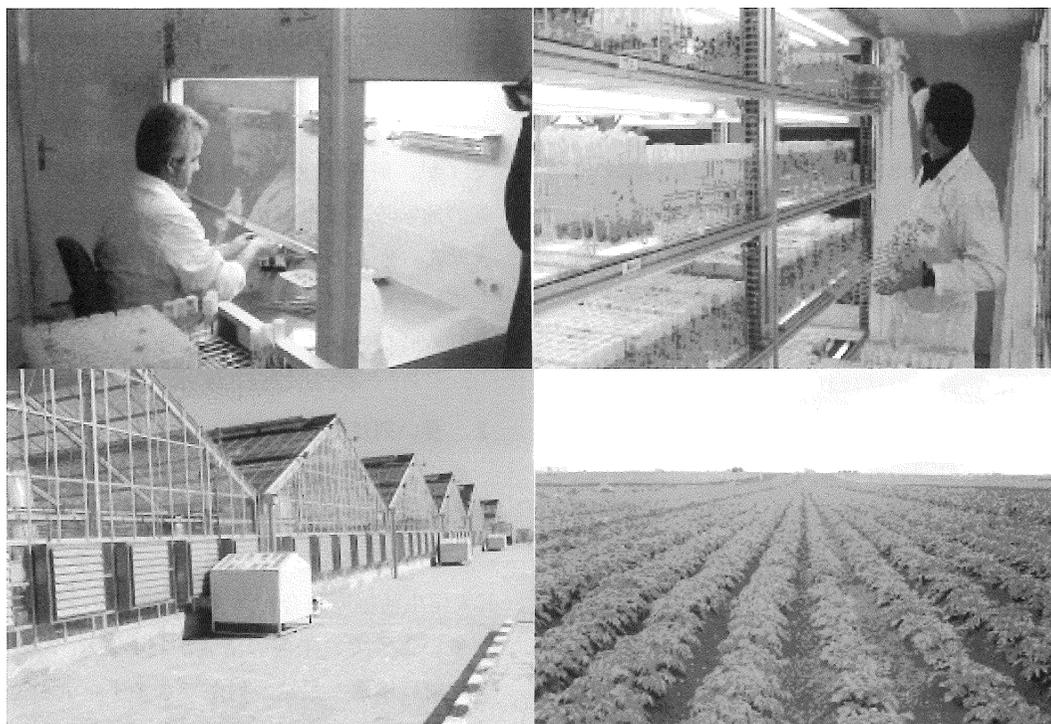


図6) 組織培養による種イモ生産。左上より右下へ。①クリーンベンチでの作業、②苗の培養、③温室、④種イモ増殖圃場 (いずれもGOSMで片山 克己氏撮影)。